

主 題：感謝の人生・実践編：敵に対して2
聖書箇所：ローマ人への手紙 12章17-21節

主イエスを信じていない人たち、神の敵に対して私たちはどのように生きて行くのか、パウロはそのことを前回私たちに教えてくれました。

☆神の敵に対する正しい対応 17-21節

1. 善を行う 17節

相手がだれであっても、また、どんなことをされても、どんなことを言われたとしても「あなたは常に善を行いなさい」と言いました。

2. 平和を保つ 18節

また、すべての人と平和を保つように努力しなさい、結果がどうであろうと、あなたは平和を作り出す者として、また、平和を保つ者として努力するようにと言います。

3. 神に委ねる 19節

あなた自身がさばきを為したり、あなた自身が悪に対して悪で応じるのではなくて、さばき、報いは、みことばを見るとそれは「復讐」と書かれています、それは神に任せておきなさい、神が良いときに最善なことを為さるからと、そのように見て来ました。

4. 悪に負けない 20-21節

1) 善を行なう：あなたに対してひどい事をする者がもし飢えているのなら食べ物を与えなさい、渴いているなら飲ませてあげなさいと。

2) その理由：そうすることによって、あなたは彼の頭に「燃える炭火を積むことになる」と、つまり、あなたに対して為した悪行に対して、それを恥じ入ることになると、そのようにパウロは私たちに教えました。

3) 勧め：そして、最後に彼は21節に「悪に負けてはいけません」と勧めを与えました。悪に悪で応じた場合は悪が勝利するが、悪に善で応じた場合は善が勝利する。「どんなときにも善を行ない続けていきなさい」と、パウロは私たちにそのことを教えました。

今日、私たちが考えたいことは、分かっているのですが、何故、善を行ない続けることがそれ程大切なのかということです。パウロは私たちに、徹底して、だれが見ても良いと思うことを行なっていくなさい、そのようなことを考えるだけでなく実践していくようにと命じました。前回、私たちが最後に見たように、どうしてこのことが大切なのか？あなたが善を行なうことによって、あなたが神のみこころを行ない続けることによって、主の栄光を現わすからです。また、私たちは福音宣教のために救われたからです。そうして私たちは、このすばらしい救いのメッセージ、福音のメッセージを人々に伝えていくのです。ですから、パウロは「だれに対してもどんなときでも、主のみこころ、主が喜ばれることをしていきなさい」と私たちに言うのです。

そのことに関して、パウロは別の個所で今私たちが学んでいること、また、パウロ自身が信じ確信していたことを教えてくれています。暫く、そのみことばをゴッショに見たいと思います。そのみことばは、コリント人への手紙第二、2章のみことばです。パウロはイエス・キリストの福音を語り続けました。主が与えてくださった使徒としての大切な務めを果たすために、彼は福音を人々に語り続けました。しかし、その中で彼は大変な苦しみを経験しました。しかし同時に、彼はその中で、主の助けと主の支えを経験する訳です。そこでパウロは、大変な苦しみがあるけれども、大変な辛さがあるけれども、大変な悲しみがあるけれども、でも、私の心は感謝に溢れていると告白するのです。なぜ、大変な中であって、なぜ、泣きたいほど辛いことの中であって感謝することができるのか？その二つの理由をパウロはこのⅡコリント2：14-17で私たちに教えてくれています。

「14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。17 私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。」

☆パウロが苦難の中でも感謝することができた理由

パウロはこのことを勝利の凱旋の例を用いて語ります。勝利のパレードです。パウロが敢えてその例を用いたのは、ローマ帝国内において勝利の凱旋、勝利のパレードは周知の出来事だったからです。古代文献には少なくとも350の勝利の記録が残っています。ですから、ローマ帝国内において、今パウロが語ろうとしている勝利の行進、勝利のパレード、これはすべての人々が知っていた出来事でした。ひょっとしたら、私たちが様々なスポーツのイベントで、勝利を収めたときにそこで為される様々なパレードを見たりしますから、少しは理解することができます。しかし、パウロは、ローマ帝国内のすべての人がよく知っていた凱旋行列、勝利のパレードを用いて、何故、私が大変な中にあっても喜び感謝出来るのか、その理由を教えようとするのです。

1. 栄光の顕示

栄光が明らかにされていくからです。人々の前で神の栄光が明らかになっていくから、パウロはどんなときでも喜んで福音を語り、どんな困難があってもその福音の働き、宣教の働きを継続したのです。先程から話している凱旋の行列、勝利のパレード、勝利の行進がどんなものだったのか、少しは私たちが理解できると言いましたが、その当時、どのようなことが為されていたのでしょうか？ウオーレン・ウァズビーがこんな説明を加えています。「外国で敵軍に完全な勝利を収めて、少なくとも、五千の敵兵を殺し、帝国のために新領土を獲得したなら、その最高司令官はローマの凱旋式を受ける栄誉を与えられた。凱旋行列で司令官は黄金の戦車に乗り、部下の将校たちに取り囲まれるようにして進んだ。パレードには戦利品や捕虜の敵兵たちも見せ物として加えられた。その行列は特別の道を通って市内を抜け、大円形劇場で終わりとなった。そこで捕虜たちは民衆を楽しませるために野獣と戦わされた。」と。このようなことが為されていたと言うのです。パウロが語ろうとしているこの凱旋のパレードがどのようなものであったのか描くことができますと思います。

戦いに勝利した将軍、また司令官がこの凱旋行列において一番望んだことは何だったのか？それは自分たちの勝利を誇示し、自分たちが、いや、自分自身が人々によって誉め称えられることです。我々の将軍はすごい！、我々の司令官はすごい！、このような勝利を収めた！と。この勝利のパレードに戦利品や捕虜が加えられたのは、自分たちの偉大な勝利を誇示するための見せ物だったからです。2：14のみことばの最初にはこのように記されています。「神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、」と。この箇所の子の二つの代表的な解釈を紹介します。敢えて、二つ紹介するのはどちらも言えるからです。言わんとしている意味は何でしょう？

解釈1：神が我々クリスチャンを勝利の兵士として行列に加えてくださったという、その意味だろうという解釈です。確かに、話の流れを見ていくと納得できます。使徒パウロはその信仰故に大変な苦しみに会っていました。その中で彼が感謝出来たのは、彼自身が主なる神が私を勝利の兵士として勝利のパレードに加えてくださったことを知っていたからです。「私は勝利者だ！」と。確かに、その様にも思います。

解釈2：「ある人を捕虜として凱旋行列に加える」というものです。恐らく、皆さんの中の多くの人たちが「ちょっと待ってください。捕虜とは敵でしょうか？戦いに敗れた敵でしょうか？私たちクリスチャンはそれとは違うではないですか？かつては確かに、我々は神の敵でしたが、今は救いに与って神の味方となったのだから捕虜として加えられるというのは意味がおかしいのではないですか？」と言われるでしょう。では、このみことばを見てみましょう、ここに「勝利の行列に加え」と記されています。これは「勝利へと導く、私たちをキリストにある勝利へと導く」という意味をもったことばです。はっきりしているのは、我々が勝利へと自らを導いたのではないということです。このみことばを見たときに、神ご自身がその様にしてくださったということです。神が導いてくださった、私たちを勝利の行列に加えてくださったのは、確かに神のみわざです。このことばを見ると、これはまさに先ほどから見ているように、将軍や司令官がパレードに捕虜を加えるのと同じような使い方がされているのです。

ですから、語義的に見るなら、ここで言わんとしていることは、今、私たちが見ている捕虜として加えられたということです。そのように取ることができるのです。勝利者か捕虜か？どちらでしょう？どちらの解釈も正しいのです。ここで留めておきます。なぜなら、パウロには自分が捕虜なのか勝利者なのかということ以上に、伝えたい大切なことがあったからです。もちろん、救われていたパウロは神の敵ではありませんから、神の勝利者であるということは間違いありません。しかし、そのことに白黒をつけたいのではなくて、パウロは彼自身が持っていたはるかに大切な関心について、大切なことについて、ここで明らかにしようとするのです。それは私たちの主のすばらしさのことです。パウロの関心は、私の主のすばらしさが人々の目の前で明らかにされることでした。言い方を変えるなら、主の栄光が現

わされること、それこそがパウロの関心だったのです。それを伝えるために彼はこのパレードを用いたのです。

もう一度、パレードを思い出してください。凱旋のパレードの主演はだれでしたか？それは勝利を収めた将軍、司令官です。ある神学者はこのように言います。「どんなローマの皇帝、または将軍であっても、受けることのできた最高の名誉は、これらのパレードの一つをリードすることであった。」と。みな望んだのです。一番名誉あることは、このような勝利の行進をリードすることだったのです。なぜなら、そのときにすべての人の注目は自分に集まるからです。すべての称賛は自分に集まるからです。司令官のすばらしさが誇示され、誉め称えられるためにこのパレードが用いられたのです。そこに付いてくるローマ兵たちも、戦利品も、多くの捕虜たちも彼の引き立て役でした。

そこでパウロは「我々の人生という行進の主演は主なる神だ」と、そのことを伝えようとするのです。我々を造り、我々を新しく造り変えてくださったお方、そのひとり子の十字架における身代わりの死と、三日目のよみがえりによって完璧な救いを備え、そして、それを一方的に与えてくださったお方こそが、誉め称えられるに値するお方なのだ、そのことを彼は伝えたかったのです。将軍がすべての称賛を得たように、パウロが言いたかったのは「この主こそすべての称賛を受けるに値する本当のお方である」ということです。私たちの偉大な神が誉め称えられること、この偉大な神の栄光が現わされること、それは私たち一人ひとりの願いであるはずですね！

神の恵みを知り、また、恵みの神を知り、そして、どれ程大きな犠牲をもってあなたや私がこの救いに与ったのか？同時に、私たちがいかに罪に汚れた者なのか、そのことが分かった者たちはこの神が誉め称えられて欲しい、こんなにすごい神がこの世界にはいらっしやるのだということを知ってもらいたい、この神の栄光が現わされること、そのことだけを願って生きて行こうとする、これは救われた者たちの当然の結果です。恐らく、皆さんもそのようにして生きておられるはずですが、主の栄光を現わしたいと願いながら日々を歩んでいらっしやるはずですが、すべてのことを通して神の栄光が現わされて欲しいと願いながらすべてのことをしておられる、そのように期待します。恐らく、その質問に対してすべての皆さんが「はい、そうです！」とお答えになることを期待します。なぜなら、私たち救われた者たちはみな、そのために生きるからです。

では、この質問に答えてくださいますか？「もし、あなたが地獄に行くことによって主の栄光が現わされるとしたら、あなたはそのことを望みますか？」、考えてください。「もし、私が地獄に行くことによって神の栄光が一番現わされるとしたら、私は喜んで地獄にいきます」と、皆さんはどのように考えますか？私たちは「それはちょっと困ります。神の栄光も現われて欲しいけど、自分も天国にいきたい。」と言いませんか？かつての信仰の勇者、神が喜ばれ神が愛され神が大いに祝され、そして、天にあってすばらしい称賛を得た信仰の勇者たちは、だれ一人として自分のことなど考えていませんでした。だから、神が喜んだのです、パウロにとっての関心は自分のことではなかったのです。もし、自分が地獄に行くことによって神の栄光が現わされるのだったら、そのようにしてくださいと、彼の関心は自分がどんな祝福を得るかということではなかったのです。彼の関心は「こんな自分を愛してこのような救いを与えてくださった。この神が誉め称えられること、主の栄光が現わされたらそれでいい！」でした。そのような思いを皆さん持っていますか？そこまで徹底して、この私をこんなにも愛して、このようなすばらしい救いをくださった、すべて神のみわざです。あなたが特別な人間だから神があなたを救ってくれたのではない、あなたがすばらしく愛において長けているから、神があなたを救ったのではない、あなたが赦しの人だから神があなたをあわれんだのではありません。罪深く汚れて自分のことしか考えない、利己的であり、心に浮かんでくることが汚れに染まった者であり、そのようにどうすることもできない者、神自身が目をそむけるような者を、神ご自身が選んでこの救いへと招いてくださったのです。皆さん、救いとはそうです。そして、そのことが分かっているのなら、私たちが望むことは、自分がどんな祝福をもらうかではありません。こんなすばらしい祝福をくださった神が誉め称えられること、そのことを望み、そのことのために生きて行きたいとすることです。

本当にそのように思っ生きて生きる信仰者になりたいものです。なぜなら、それこそ主の前に相応しい生き方だからです。パウロはそのことが彼の一番大切な願いでした。そして、それがいつも可能だということを知っています。もう一度、14節を見てください。「神はいつでも、」と記されています。パウロはこの偉大な主なる神のすばらしさが、彼の生活を通して明示されることを知っていたのです。自分の生活を通して、自分の為すことを通して神の栄光が現わされていく、神のすばらしさが明らかになっていく、そのことを彼はよく知っていました。「神は常に自分を通して神のすばらしさ、栄光を示してください」と、そのことを知っていたのです。だから、パウロはみこころに従って福音宣教を行なうことによって様々な困難を経験したときに、その困難も苦難も主の栄光が現わされる機会であると確

信したのです。そうなのです、皆さん。あなたが忠実に主に従って行かれるときに、大変な困難を経験する、でも、すべてのことを知っておられる神、あなたをその所に導かれた神ご自身は、その状況の中でご自分の栄光が現わされることを期待しているのです。

パウロが何をしたのか？大変な困難の中に、大変な苦しみの中にあって彼が何をしたのか？彼はますます神の栄光が現わされるために、どのような苦難、困難の中でも、喜び感謝しながらみこころに従順に従い、福音を宣べ伝え続けようとしたのです。大変なことがいっぱい起こるけれども、そのすべてを主に任せて、私の責任は主の前に正しく歩み続けていくこと、彼はその様にして歩み続けたのです。そして、私たちがよく知っているように、パウロは神によって用いられました。神は彼を大いに用いました。そして、あらゆる状況を通して、神の栄光が彼を通して明らかにされていきました。大変な中にあっても、困難な中にあっても、彼が感謝をすることができたのはどうしてでしょう？この困難も神の栄光が明らかにされる、その機会であることを彼が知っていたからです。

2. 福音の流布

二つ目の理由です。14節の後半に記されています。「福音の流布」です。福音が広まっていくこと、福音がより多くの人々に知れ渡っていくことです。そのことをパウロは知っていたから、どのような困難の中にあっても喜び感謝したと言うのです。「至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいませ。:15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」、ここではっきりしているのは「かおり」のことです。確かに、勝利の凱旋の行進中に香が焚かれていました。行進している者だけでなく、その沿道の者たちもこの香を嗅いだのです。周りの人たちみながその香を嗅ぐ、そんな機会だった訳です。

パウロは「かおり」に関して、二つのことを教えています。一つは「キリストを知る知識のかおり」と言っています。もう一つは15節に「神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」とあります。

1) キリストを知る知識のかおり

ここで使われていることばは、この後のⅡコリント4:6にも使われています。「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」と、何のことでしょう？お分かりのように、これは救いのことです。この救いは神のわざだと言っているのです。「キリストを知る知識のかおり」、人々がこれを通してキリストを知ると言うのです。キリストがどんなお方か？何をしてくださったのか？まさに、これは救いのメッセージです。福音のことです。

パウロは自分が救われたその目的をよく知っていました。それは主なる神のすばらしさを証することです。同時に、パウロは福音宣教のために主が彼を一日中用い続けられることを知っていました。どんなときでも、神がパウロを用いて福音宣教をさせてくださるということを彼は知っていたのです。盗賊に襲われているときでも、事故に遭ったときでも、いのちを狙われているときでも、不安を抱えているときでも、問題を抱えているときでも、悲しみを経験するときでも、人々から誤解されているときでも、人々から非難されるときでも、一人ぼっちであったときも、喜びに溢れているときでも、すべての機会を支配しておられる主が、人のために備えてくださった最も高貴な救いを、人々に伝えるために与えてくださった機会だということをパウロは知っていたのです。

皆さんご存じですか？主が私たちをこの福音宣教のために救ってくださったとしたら、私たちが経験するありとあらゆる出来事、我々の日々の生活のすべての機会は、そのために神が敢えて与えてくださったものです。パウロはそのように考えました。ですから、どこに行っても彼はそのことを話す、その当時の人々のことばを使うなら「ペストのような存在」でした。どこに行ってもキリストの話をする、どこに行ってもイエスの救いの話をする、やっかい者だったのです。なぜなら、パウロは知っていたからです。そのために私は救われているということ。このすばらしい神の救いを人々に宣べ伝える、そのために私は救われている。だから、私の身に起こる様々な出来事、主の前に忠実に生きようとして、その中で起こってくるすべての出来事はキリストの福音を語るその機会なのだと言うのです。

日々起こるすべてのことは、救いを人々に伝えるために主が与えてくださった機会であることをパウロは知っていました。ですから、パウロはどんな時でも主の前に喜ばれることを選択してそれを行おうとしたのです。ある神学者はこう言います。「福音の真理を、生き方をもって世に明らかにするために、あなたたちは救われている」と。私たち信仰者は、福音の真理を生き方をもって世に明らかにするために救われているのです。私たちはもちろんことばをもってキリストを証します。問題は、私たちは自分の生き方をもって証しているかどうかです。私たちは世にあってキリストの証をするだけでない、我々は証の人生を生きているかどうかなのです。誤った行ないは、すばらしいことばによる伝道を台無しに

してしまいます。もちろん、私たちが知っているように、だれ一人として主の前ですべての点で完璧に正しく生きることができる人はいません。だから、私たちは自分の過ちに気付いたときは、それを正しく解決するのです。私たちがしたくないこと、しづらいことは、自分の過ちを認めて謝罪することです。でも、それも正しいことだからやるのです。相手がだれであっても、自分の子どもたちであったとしてもするのです。なぜですか？神を愛しているからです。神が喜んでくださることを私たちはしたいからです。「お父さんなんだから、お母さんなんだから、親なんだから、大人なんだから…」と、そんな言い訳は神の前に喜ばれません。

大切なことは、私たちはことばでもってイエス・キリストのすばらしい救いを語ることです。しかし同時に、我々は自分の生き方をもって、この神がどんなにすばらしいお方であるかということ世に明らかにしていくという、大きな務めを神からもらっているのです。だから、私たちには神の助けが必要なのです。だから、私たちは祈りの人になることが必要なのです。神の助けなくしてそのようなことは不可能です。「キリストを知る知識のかおりを放て」と、このすばらしい救い主を、このすばらしい神を知るためのメッセージを語り続けて行きなさいと言います。

2) 神の前にかぐわしいキリストのかおり 15節

この「かぐわしいかおり」ということばは、エペソ人への手紙5章2節に出て来ますが、そこには「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」とあります。ここでパウロが何を語っているのかが分かります。主イエス・キリストのいけにえのことです。ご自分がいけにえとしてご自分のいのちをささげられたということです。ですから、Ⅱコリント2：15で「神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」と言ったとき、そこでパウロが言いたかったことは、このエペソ5：2で言った「いけにえ」と関連しているのです。Ⅱコリント2：15を見て、「かぐわしいかおり」はいついたいだれなのかというと、それは「私たち」です。私たち信仰者が「かぐわしいキリストのかおり」だと言うのです。つまり、パウロがここで表わしていることは、キリストから立ち上ってくるそのかおり、それが私たちだと言うのです。キリストのいけにえ、そこから立ち上ってくるそのかおりのことです。

先ほど、私たちは確かに、14節でキリストのそのすばらしい福音を伝えていくこと、それによって人々は神を知るということを見ました。15節を見たとき「我々はキリストのかおりだ、いけにえであるキリストから立ち上がってくるそのかおりが我々だ」と言いますが、今読んだところでは「神の前にかぐわしいキリストのかおり」とあります。ということは、15節でパウロが言うことは、神が好まれる、神がお喜びなるかおりだと言うのです。何のことでしょう？私たちが神から託されたこの福音のメッセージを忠実に語り続けていくなれば、まさに、それが神の前にかぐわしいかおりとして神がお喜びになるということです。私たちがすばらしい神のことを伝える、それによって人々が神を知るだけでなく、私たちがこの福音のメッセージを忠実に語り続けていくことこそ神がお喜びになることです。だから、一生懸命主の証をしている皆さん、家庭にあつて、親族の中にあつて、友人たちの間にあつて、あらゆる機会を用いてイエス・キリストの福音を宣べ伝えておられる皆さん、あなたに言えるのはこのことです。「主はあなたのことを喜んでいらっしゃる。なぜなら、あなたは神の前にかぐわしいキリストのかおりだからです。」と。キリストのすばらしさをあなたは伝えているのです。そして、そのすべてのことを神ご自身がお喜びになっておられるのです。

パウロは知っているのです。福音を通してでなければ、人々はイエスのすばらしい救いを知ることがない、同時に、私たちがこの福音を忠実に語っていくなら神が喜んでくださると。だから、パウロはどれ程人々が彼を苦しめたとしても、主が喜んでくださることだからと、喜んでこの福音のメッセージを語り続けたのです。

3. 福音の結果

16節から見ると、福音の結果が記されています。パウロは神の栄光が現わされることだから、喜んでこの働きを忠実に行おうとしました。この福音が広がっていくから、このすばらしい救いが人々に広がっていくから彼は忠実に語ろうとしました。同時に、それは神が喜んでくださることだから、彼はそのことを忠実に行ない続けようとしたのです。ことばだけでなく、主のみこころに従い続けるその生き方をもって神のすばらしさを彼は証しようとしていたのです。

そして、16節にはその福音の結果が書かれています。「ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。」と、ここにも二つのかおりが出ています。「死に至らせるかおり」と「いのちに至らせるかおり」です。

1) 死に至らせるかおり

もう一度、行進のことを思い出してください。行進に加えられた捕虜たちはこのかおりを喜んでいま

せんでした。なぜなら、このかおりは自分の身にこれから起こることを暗示していたからです。大円形劇場に連れて行かれて、そこで野獣と戦わされたと言います。みんなではありませんが、一部の人はそうして殺されたのです。あるものによれば、彼らはローマ人たちが信じていた様々な偶像にささげ物としてささげられたともあります。また、ある者たちは奴隷として売られていくのです。いずれにせよ、このかおりは捕虜たちにとっては「死に至らせるかおり」だったのです。処刑を意味していました。

そして、パウロはここで彼らだけでなく、福音を拒み続ける者にも同じことが言えると言います。私たちの周りでも、この神のすばらしい救いのメッセージを聞いていながら、主ご自身の招きを聞いていながら、それに対して心を閉ざし続ける人々、拒み続ける人々、彼らにとってもこの福音は「死に至らせるかおり」だと言うのです。どういう意味でしょう？福音という神の救いのメッセージが明らかにしていることは「救い」と「さばき」です。「罪の赦し」と「罪のさばき」です。なぜなら、私たちが「イエス・キリストによって罪の赦しを得ることが出来る」と言うなら、それはイエス・キリスト以外には罪の赦しを得る方法はないということです。「イエス・キリストが唯一の救い主だ」と言うなら、イエスを信じない人たちは、その救いに与ることなく、却って、自らの罪のさばきを受けるのです。ですから、救いのメッセージを語るときに、それを拒むなら、そこにはさばきがあるということを明らかにしているのです。

パウロはⅡテサロニケ1：7-8で「苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。：8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」と言っています。この救いを自らの意志で拒んだ者たちには、必ず、自らの罪のさばきが下ります。神の救いを拒んだのですから。ですから、確かに、パウロは「ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、」と言います。

2) いのちに至らせるかおり

同時に「いのちに至らせるかおり」とも書かれています。行進している将軍や兵士たちは勝利を大いに喜んでいました。同じように、福音を受け入れた者たちにとってこの福音のかおりは、永遠の希望であり、永遠のいのちをもたらす喜びのかおり、知らせでもあります。人々にとってイエス・キリストの福音は喜びです。イエスが私たちに備えてくださったこのすばらしい救いを、私たちは喜びながら感謝しながら誉め称えています。

そのような結果が訪れると言います。この福音のメッセージを聞いて人々はどちらかの反応をします。悔い改めてその救いをいただくとするか、継続して神に逆らい続けるかのどちらかです。主は、私たち信仰者をこのような働き人として用いてくれると言います。パウロは自分がこのような働き人だということを知っていました。私たちもこのような働き人として神が用いてくださいます。でも、そのために私たちはあることに注意していなければいけません。その働きを為すための「力」のことです。どのようにしてそれを実践するかです。見てください。16節の終わりに「このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。」と、パウロはこのような質問をするのです。いったい、だれがそのような働きにふさわしいのかと…。パウロは神の助けが必要だということを知っていました。ですから、エペソ人への手紙1章19節で「また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるよう。」と言っています。あなたのうちには神のすごい力が働いているのです。パウロが望んだことは、力が与えられることではなく、与えられている力についてあなたが正しく知ることだったのです。どのような力がもうすでにあなたに与えられているのか、そのことを知りなさい、知って欲しいと言うのです。

信仰者の皆さん、キリストの証人として神はあなたを大いに使ってください。このすばらしい福音を宣べ伝える働き人として、神はあなたを大いに使ってください。そして、その働きのために必要な力を主はもうすでにあなたに与えてくださっています。私たちの力では無理です。しかし、みことばは私たちに教えます。「主の力がもうあなたに与えられている。大切なことは、あなたがそのことに気付くことだ。」と言うのです。主の力だけではありません。パウロのことばを使えば「主ご自身が資格を与えてくれている」と言います。Ⅱコリント3：5を見てください。「何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。」と、ここに「資格」ということばが2回出て来ます。最初の「資格」は形容詞が使われています。「能力、力量」という意味があります。後半の「資格」は名詞です。「何かをするのに十分な能力、適任」という意味を持っています。パウロがここで何を言っているか、それは「このような働きを為していくためには神の助けがいる。そのことを行なっていくための能力や力は私たちのうちにはない。でも、神ご自身がその働きのために十分な能力、力を備えてくださっている。」と、これが神が私たちに教えてくださっている真理なのです。

だから、私たちはいつも神の力をいただきながら歩いていくことが必要なのです。私たちが祈りの人になっていく必要があるのも、いつもこの力、助けが必要だからです。

パウロは私たちに、彼自身の経験から、神から与えられたその務めを忠実に果たして行こうとするときに大変な困難、大変な問題があると言いました。でも、その中にあっても彼は怯むことなく、感謝をもってその働きを忠実に継続し続けました。その理由は何でしたか？私たちは二つのことをみて来ました。一つは、忠実に歩み続けることによって神の栄光が現わされていくから、私はそのように生きるのだと言いました。忠実に歩み続けることによってこのすばらしい福音が人々に広まっていく。どんな機会でも、その中であなたが忠実に主を見上げて、主に従って行くなれば、主の前に正しいことを選択し続けていくなら、主はあなたを用いてくださって、このすばらしい救いが人々に明らかにされていくと言うのです。そして同時に、その様な歩みをしているあなたを主はお喜びになると言います。だから、パウロは感謝をもって忠実に歩み続けようとしたのです。

ローマ人への手紙の中で、パウロは私たちに「救われた者としてあなたは感謝の人になりなさい、感謝の人として生きてゆきなさい」と教え、そして、具体的にどのように生きて行くのか私たちに教えてくれました。これらを実践してゆくために、簡単に四つのことを言います。

結論 : みこころに沿った生き方をどのように実践するのか？

1. どんなときでも主の愛を覚えること

私たちがこの主のみこころを実践していくために必要なことは、主の愛をいつも覚えることです。ローマ12：19に「愛する人たち…」と唐突にこのことばが記されています。パウロは意図的にこのことばを用いています。これは「愛されている」という意味です。ですから、この手紙を読んだ人たち、パウロのどのように生きて行くのかというメッセージを聞いた人たちが、パウロが言う「神に愛されている人たち」ということばによって、再び、「そうなんだ！私は神から愛されているのだ。大きな犠牲をもって、大きな愛をもって私は愛されているのだ。」ということを感じるようにというのです。「私は愛されているのだ！」と、そのことを覚えることが必要です。パウロはIコリント15：9-10でこのように言います「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。：10ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と、また、Iテモテ1：12-17でもパウロは自分の罪深さを告白しています。同時に、救われたことを感謝しています。私たちの心が感謝しているなら、喜んで主に従ってまいりましょう。私たちが愛されているということは今一度覚えることです。

2. 主のさばきを覚えること

必ず、その日がやって来るのです。主はそのことを約束なさいました。私たちは悪に対して悪でもって報いるのではないのです。それはもう主にすべてお任せするのです。その日がやってくるからです。

3. 主からの務めを覚えること

私たちはどのような務めをいただいているのか？そのことを忘れてはいけません。何のために生きているのか、何のために神は今日をくださったのか、そのことをしっかり覚えてその働きを為すことです。そのためには主からいただいた務めを覚えなさいといけません。

4. 主からの力を覚えること

主が与えてくださる力、その力を覚えて私たちは歩むことが必要です。

どのように私たちは生きて行くのか、そのことを私たちは見て来ました。信仰者の皆さん、今一度、イエスの十字架を見上げましょう。私たちの創造主なる神が私たち罪人のために何をしてくださったのか？ご自分のひとり子のいのちを、あなたや私の身代わりとして十字架でささげてくださいましたのです。イエス・キリストは私たちのために死んでくださったのです。そして、三日後に敢然とその死からよみがえって今も生きておられます。私たちはこの方に仕えるのです。この方のために私たちは生きているのです。この方のすばらしさを証するために、この方が備えてくださった救いのすばらしい知らせを伝えるために。しかし、そのためには私たちが感謝していなければなりません。十字架を見て、感謝をもってこの方に応答して行きましょう。

パウロが言うように「私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

(ローマ12：1)、「私のすべてを使ってください。なぜなら、あなたは私のために最も大切ないのちを捨ててくださったから」と、この感謝が私たちが感謝な人となります。この感謝が私たちが神に喜んでいただく人へと変えていきます。

主の恵みを覚えて、そして、感謝をもってこの一週間歩いてください。

《考えましょう》

1. 福音宣教がもたらす様々な困難の中にあっても、パウロは主に感謝をささげ続けることが出来ました。その二つの理由を挙げてください。
2. 「キリストのかおり」である私たちが主にますます喜んでいただくためには、どうすれば良いのでしょうか？
3. パウロは困難の中にあって、どのようにして彼に与えられた福音宣教の務めを果たしていましたか？また、その力はどこから得たのでしょうか？
4. みこころに沿った生き方を実践するためには、どうしたら良いのでしょうか？
自分のことばで書いてください。